



Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター
Newsletter No.45 (2013.1.31)



市大発、英語パフォーマンス“OPP”とは？

英語を学習したら英語で表現したい。そんな思いに応えるイベント、それが OPP です。国際学部の岩井千秋教授の掛け声で、大学英語教育学会（JACET）中国・四国支部 OPP イベントとして 2009 年にスタートしました。授業の枠を越え、各参加校が思い思いのパフォーマンスに磨きをかけて臨みます。他大学の学生と切磋琢磨できるまたとないチャンスに、本学からは岩井千秋舞台監督の元に集った岩井ゼミ生が参加しました。

目次：

大学間連携による英語の発表イベント OPP

国際学部 岩井千秋先生・・・・・・・・・・ 1

ミニコラム：芸術学部 海老洋先生・・・・ 2

ふたつの「ポット」音 青木茂『油絵初学』

名誉教授・芸術資料館前館長

大井健地先生・・・・・・・・・・・・・・ 3

青年海外協力隊の紹介イベント

国際学部 岩田一成先生・・・・・・・・・・ 4

その他イベント報告・・・・・・・・・・・・ 4

大学間連携による英語の発表イベント Oral Presentation & Performance (OPP)

国際学部教授 岩井 千秋

見出しの OPP イベントは本ニュースレター 36 号（2010 年 1 月 25 日号）の小欄で紹介させていただきました。端的に言えば、OPP は「英語授業で取組んだ学習の成果を、恥も外聞も捨て、他大学の先生、学生の前で発表する」行事のことです。学習者側は英語学習の目的意識と動機を高めること、指導者側は発表能力を育成するための指導法を考案し、お互いの発表を通じて学び合うことを目的としています。言わば「互恵」と「協働」が OPP の基本コンセプトです。

本誌でのデビューから 3 年、昨年（2012 年）の師走に 4 回目のイベントを広島工業大学のデネブホールをお借りして開催しました。回を重ねるごとに規模も参加者数も漸増し、各大学の発表内容や方法は格段に進化していることを実感します。詳細はウェブサイト*でご覧いただけますが、以下では OPP の趣旨や実績について少し触れてみます。

まず OPP には 5 つのポリシーがあります。中でも特に重視しているのが「競争しないこと（No competition）」です。OPP 参加教員の一人はこのイベントを「祭り」と形容されましたが、これは OPP

を言い得て妙です。祭りにありとあらゆる人が集まるように、ことばの習得には人を相手とする使用の場が必要です。言語習得にこうした場（祭り）が不可欠なことは私の専門の応用言語学では今や常識、

OPP はその研究理論を踏まえて企画したイベントです。さらに、英語使用に大学差も学力差も問題ではなく、OPP が競争を目的としないのもそのためです。

参加数は初回の 6 大学から、昨年は 8 大学 9 団体に増えました。主には広島県



岩井ゼミ生による発表 “It's a University World!”

内の大学ですが、一昨年から松山東雲女子大学さんも加わり、松山の温泉についてインタビュー調査した結果が発表されました。個性的なのは海上保安大学校の学生さんたちの発表で、動きの凛々しさと発表の声量には私たちが英語学習に忘れかけているものを想起させられます。その他にも自作のジャズチャンツ（広島工業大学）、映画を利用した音声吹き替え（広島国際大学）、ミュージカル（安田女子短期大学）、演劇や文学作品の朗読（県立広島大学）、英語達人へのインタビュー（広島修道大学）などがこれまでありました。

（P2 へ続く→）

ミニコラム 外国語に想う【40】

「英国でのこと」

芸術学部 准教授
海老 洋

海三三山三三

◇海老先生 個展のお知らせ
2月20日(水)～26日(火)
日本画展 一海三三山三三
日本橋三越本店
本館6階特選画廊

私の妹は、英国人と結婚してもう20年くらい英国に住んで居る。日本に帰ってくればたまには会うが、私は英語が苦手なのでこちらからはあまり行かないし、電話をするのも億劫に感じる。それでも、結婚する時には彼女の夫となる英国人に会って、兄としての挨拶をしようと思った。「妹をたのむ」これを、妹に訳して教えてくれと頼んだが、兄の台詞でそれにしっくりくる英語が見つからないという。こんなときには“おめでとう”か“2人で幸せに”だと彼女は云うが、納得がいかないの、言う相手である当の英国人にも訊いてもらったが首を振り妹と同じ意見であった。結局“おめでとう”を口のなかでゴニョゴニョ言ってそれで終わりになった。言語の、というより国による感覚の違いは体験しないと実感できないものである。言いたいことが伝わらないもどかしさと共に、そう感じたのを憶えている。

この先、妹夫婦に何かあっても「妹をたのむと言ったはずだ…」と決め台詞が言えない。とても残念である。



(→ P1 から続く)

ちなみに私は国際学部3年のゼミ生と一緒に参加(私も発表者の一人)しています。初回は言語サービスというテーマで調査した結果を発表。2・3年目は「平和」をキーワードに、コーラル・リーディングという手法で英訳された原爆の詩の朗読(2年目)、世界の反戦歌を調査して生演奏と合唱も交え発表(3年目)しました。そして、4回目は国内の外国語教育の実情を調査した結果をまとめ、It's a University World (It's a Small World のごろ合わせ)と題して発表しました。

最後にその成果ですが、指導に関わる技術的なものを挙げると限りありません。それ以上に大学における英語教育のあり方について一緒に考える仲間とネットワークが広がったことが何よりの収穫です。OPPはすべて手作りで時間を取られますが、その成果は何ものにも代え難く、すでに頭の中は次回のイベントに向けて動き始めています。

OPP 基本ポリシー

- 1 競争しないこと。No competition.
- 2 英語を使うことを楽しむこと。
Enjoy using English.
- 3 お互いにレスpektしあい、学びあうこと。
Respect each other and study from others.
- 4 発表方法や内容に規制を設けないこと。
No restrictions on presentation styles and contents.
- 5 できることをする。Do what you can do.

広島国際大学生によるクリスマス・タブロー
“イエス・キリスト誕生物語”

「海と男と海上保安大学校」のテーマでの発表

* OPPのウェブサイト
<http://chiaki.intl.hiroshima-cu.ac.jp/Bulletin/07OPP/>

社内装丁 (3)

ふたつの [ポット] 音
青木茂『油絵初学』

大井健地 (名誉教授・芸術資料館前館長)

青木茂『油絵初学』1987年9月刊、は函入りの紙クロス上製本であるのだが、装丁者架蔵本の函は早い時点でどこかに消えた。僕の函の紛失行為は、頻繁に取り出しているとも解せるが、いつくしみが欠けているとも言われうる。

ところが先日、刷り出しの“函板”をプライベート資料の奥底から偶々見つけた。製函前のこの状態で公開しておくのも一興と思い図版紹介しておく。

作業はこれから“断ち”があり“折り”があり、ステープルで止めることになる。「函の天については縄の絵柄がこれでめいっばいのようです。よって、しっぽのほうを上にした」との制作担当者の連絡メモがついていた。

装画はむろん高橋由一(1828-1894)の《蛙》(明治10年ca. 東京芸大蔵)。



尻尾と頭に一刀両断。『油絵初学』函。“函板”状態の校正紙部分。

日本伝統美意識では絵に描かれることのなかった「静物」であり、西欧油彩にない独自規格の、柱掛け可能な縦長形である。

本書での青木さんの評価というか賛辞はこうだ。「これはもう視覚による自然描写をこえているといってもよく『造化の秘奥』をのぞき見た人の絵といってもよい」。

「対象への迫真に憑かれている作家の熱誠が見える。由一の代表作であるばかりでなく、明治からの日本でこの絵を超える絵画は、結局生み出されていないのではないか」。

そこまで言うか。面映ゆいまでの熱讃である。が、由一画業の全体については「由一は特殊な題材のとき以外は、単に私たちの回顧趣味を満たすだけの作品しかない」と言っている。あの熱気とこの冷静さ、定見なき読者(僕を例とします)は揺さぶられっぱなしの仕儀となる。

本書には良書推奨もあるが稀書旁引、珍本披露もある。心すべきは二次的研究書の一部に対して「読むに足る内容をもっていない」とか「浅い読みである」とか、近年はもっときびしく「何々などというのはただの寝言で研究者とはとてもいえない」、「何々などというのもウソである」(「一寸」第51号)との断罪も処々に見うける。資料の裏づけなき憶測執筆者は斬られっ

ぱなしの仕儀(僕は恐怖する)。

一見八方破れのスタイルに見えるが繰り出す舌鋒は鋭く鮮烈。読みやすくないが平板な事実羅列ではない。明暗対比を強めようとする濃密な叙述。

日本近代の美術史研究は他分野、他時代に比べて遅れているという認識は、美術史研究を狭い領域に閉じこめない方法に開かれます。陽を浴びない資料の森のなかから聞こえるのは伝統と切れた近代日本文化批判の声音です。近代日本文化が怪しければ徳川300年に、また中国3000年に目を向けざるを得ないことにもなる。

「凡出ノ僮夫」が由一の《花魁》を見てよだれを垂らす、と服部撫松『東京新繁昌記』明治14年、に記されている。ポットデノイナカモノのルビがつく。「ぽっと出の田舎者」(広辞苑)である。

鉛筆はオランダ語

ではポットロートウツ (potlood)。「ぽっとろおど またペンしる」ともいふ、と『絵入智慧の環』明治3年、の図版説明にあるそうだ。

油絵初学の時代の東都の文明開化期の[ポット]音の2事例が本書に現われるわけだ。

遠い距離にあったイナカモノの手に鉛筆が握られる事態を想像せよ。広辞苑立項の「ぽっと出」の語は現在、死語に近いかもしれない。日本語には不採用となった「ぽっとろおど」は今もアムステルダム街で使われ、旅人はレンブラントがまたアンネ・フランクが手にした筆記具に思いを寄せることになる(かもしれない)。

由一の画集を手にとって《読本と草紙》(明治8-9年、金刀比羅宮蔵)に描かれた鉛筆を見てほしい。斜めにたてかけた鉛筆は今にもすぐ使えるようで、時を超え僻遠の文房空間を越えて地上の不条理告発を天に訴えている(のかもしれない)。

鉛筆話の蘊蓄が録された「ふたりせいしょう」の章は山岡成章(1846年10月-没年不詳)と山田成章(1845年9月-1898年11月16日。墓は谷中霊園甲7-4)を扱う。冒頭にふたりの区別ほかが明瞭でない歴代美術史家の不備を突ついたあと、山田の《ヒポクラテス像》周辺を論じ図版紹介している。この図もぜひ見てほしい。

センター初！ 青年海外協力隊 パネル展を開催

2012年11月30日～12月6日の間、語学センターのホールを利用して、センターとしては初めてとなる青年海外協力隊のパネル展が開催されました。国際学部の岩田先生が企画され、写真にあるように協力隊員の活動の様子などが紹介されました。ホールはパネルやパンフレットの彩りでとても明るくなり、立ち止まる学生も多く、賑わいをみせていました。

「青年海外協力隊の紹介イベント」

国際学部 准教授
岩田 一成



語学センターホールでのパネル展の様子

「(漠然と) 海外に出てみたい、でもどんな仕事で関わることができるのかわからない」なんて人はいませんか？ 本学には国際学部があり、海外への興味を持つ学生が多数在籍しています。そういう学生のニーズに答えるため、昨年からは青年海外協力隊のOV(OB・OG)による出前講座を本学で始めました。新卒で参加できる職種の方を中心に来てもらうことで、学生の進路選択にも参考になると考えました。2012年は12月6日(木)に3人のOVを招きました。3人の職種は、日本語教師、青少年活動、体育です。それぞれの活動について学生は興味深く聞いていました。

その出前講座に先立って語学センターでは、青年海外協力隊のパネル展を行いました。11月30日から12月6日まで、会場はトイレ前のモニターがあるスペースでした。さまざまな職種の方が、いろいろな

国で活動されている写真に学生は足を止めて見てくれました(写真はパネル展の様子)。写真があると青年海外協力隊の活動が具体的にイメージでき、興味を持ってくれた人も多いと思います。せっかく大学で国際問題などを学ぶわけですから、海外に飛び出して自分の目で見てみませんか？ 私自身、青年海外協力隊のOVですが、学生時代もいろんな国を見て歩きました。こういったパネル展や出前講座をきっかけに海外に飛び出していく学生が出てくることを期待しています。

なお、出前講座終了後、JICAの方へ問い合わせをしてくれた学生が多かったため、春には市立大学内で青年海外協力隊のイベントが開けないかという打診が来ています。語学センターでも対応できる範囲でJICAと協力していきたいと考えています。ポスターやチラシに注目しておいてください。

その他イベント報告

①いちだい知のトライアスロン 映画上映会

12月3日(月)～12月21日(金)に、今年度は2回目となる映画上映会を開催しました。今回は、国際学部ゴーマン先生に映画を推薦していただき、毎日13:30～19:00の間、ホールにて上映しました。テーマは"Based on works by British Writers"で、イギリス作家の作品を元にした映画7本を、日替わりで上映しました。来年度も知トラの上映会を2回予定しています。新たなテーマでお届けする次回の上映会をお楽しみに！

②「なぜ、どうやって、どこへ留学するためにいまでできること、すべきこと」～ハワイ大学留学体験談～

1月16日(水) 昼休みにLL408教室で、2012年12月にハワイ大学の交換留学から帰国した、国際学部4年生の宇郷麻美さんが体験談を発表しました。約10名の参加者は、熱心にメモを取りながら宇郷さんの話に聞き入っていました。



ハワイ大学体験談発表の様子

③自主制作映画『運命の背中』の上映会(国際学部「発展演習II」柿木先生クラスの主催)

1月16日(水) 17:00～17:40にLL404教室で、"ヒロシマ"をテーマとした映画が上映されました。

発行日：2013年1月31日

発行：広島市立大学語学センター 〒731-3194 広島市安佐南区大塚東3-4-1

編集：堀本真由美、伊達美和子

Phone：(082)830-1509

Fax：(082)830-1794

Email：lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp

ホームページ：http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html